

027
297
1



| |
|-----|
| 029 |
| 297 |
| 1 |

愛知女子
第 1504 號
圖書

前名
新

二
三
四

一
二
三

序



此一冊を阿叟の著本
例の玉三子内麻と
つては、
丁何れに
お僕の半兵と
つては、
一冊の
心と
つては、

こゝに小字の「埋火」が「ら
突あ」せや、六のれすゝす
筆と深然と山とを扱ひあへ
く先或之を満おまゝに明と
すゝ雪の中へ塵れ帰るおちゝ紙
今やあつと使給の「落」を結

ひはるもあつ高名回門の秀
詠を乞ふ其居れかゝりよと
あすもやあつとせむゝと
滑靴をこゝに去りと礼々居廻る

正



狩野梅笑
 一
 日

歌仙

柳を流翠の長橋也初付由 斑鷺
 袖と唐紙小あゝ不埋火 平舎
 河豚汁出見せいかろ名きわん 帰耕
 りふ多儲くは此是々々ぬ入舟 宜来
 有明ふもやと晴々々松の声 芳菊
 鶉鳴ふ新未冬々々々山 鷺

春のついでに是の位はふは帯 舎
 んと仙舟の匠者不煩も、 耕
 かへ舟のたすきもく降り着此雨 来
 味増はさ仕只ふ家の方丈 菊
 秋換平伝くち寄ふ夷とも 蓼太
 梅も白の月奥の云月 更登所
 友はあそく身休む此春も 舎
 取けたて夜も春のくく寐 来

春の味はふ親類も捨坊主 鶯
 急守ししう浪の位濱 太
 月代もねえり星ふき卯卯 登
 ちこいさく袖ふた只此處 菊
 竹抄の仲並とくや寸浪能来 来
 年とふを伝ふ中わり 耕
 ちの葉れ電ふ星ふ降 齋 太
 中く馬くは是ハ神風 鶯

筆張のふもくくふ新英舎
才むすこ此若ふふ出る 来
勝えもほ家とかな此く冷未履 耕
之勝く是也すふ七夕の月 太
畑もすく暑未備る種此夢 藝
矢くせに改く平 獲乃夕風 耕
と雲も風の中を於蝶かへら 太
云層ふくく此をわくくす 藝

所の名北哲のい味は若れ真 耕
時り 地ふふ尔月病是病 舎
唇れ唇首ふ唇くく糸壺 菊
多くをく候くあけ時時以 鷺
ふふ未くく志未と真のくく喉 太
遠是の未をむくく苗代 舎

斑鷺 七句 平舎 六句
 帰耕 六句 宜来 五句
 芳菊 四句 吏登 二句
 蓼 太 六句

予 冬 去 後 上 乃 小 庭 縁 一 高 根
 の 吏 仙 亭 小 校 と とも む 一 日 何 来 の

方より飛脚 到 来 昨 の つ づ け を
 告ぐ あら とも 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 松 ありて、 武 士 小 小 小 小 小 小 小 小
 小 松 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
 小 小 小 小 小 小 小 小 小 小 小 小
 聖 廟 の 清 園 子 子 子 子 子 子 子 子
 向 へ て 折 ち や 一 小 吏 信 の 画 小 楠 氏 の
 檜 井 の 若 此 別 と 掛 子 子 子 子 子 子 子

とろろんよよしき若光のおとやの
かるふらつーく好意を伺ふよに
ははの筆とるらうとて細め伊豆
氏此ふとをゆへく宮中氏のとむ
かのくま実情をさふゆへく
ふれ祖叔母しし首途を信りて
其厚志と感してふふらつるふ
別と強し一侍る

鴨々々我も飛りや馬中鞆 蓼太

文通

沖の情状を行

あふふを伝や中々此病う 青辨

病持質

掃除

おとろむ心妍しき舞む志高次第 蓼太

雪中庵

臂利

一敬堂

利刀のくぼきをくわや神の栗 芳菊

爪切

和声

さうへるまや老木此爪くわ 帰耕

居凡呂

曇涼

朝まや我も湯まの火燗多 平舎

肥立

史景

まの庭のま渡もまて牡丹 宜来

杖

礼右

まの菊の杖やちとせれ坂の友 斑鷺

報冬

あてまをくまをくまやむらさき 柳居

山さか木通はははははははははは 秋瓜

同

あまねまやまのやまの路へ入る心 祇

尾氷子むすひくまの路へ入る心 祇

同

清くしつらき山の一ふり 寸長

秋もすくも氷と研やふらば 梅人

暮の世に恨みくも木枯れ水 風葉

同

すまひ石鳴や一と秋さききり 李蹊

層雲つらふふあきくして乃もふ 津水

同

木枯や層よのねと薄氷 馬光

さあくのまふふきり 倉小 舟阿

冬章

松をのしつや口くくさ履水 春來

くつらやむしり京四天王 米仲

同

摘てをら及んくまの鴨吠声 吏鏡子

十月の朝日夕日や水車

斑根子

空坂雜のけしめや伊達の屋延

貞笠子

虫のまはし今編さひま枯中水

桃李子

砂子ちる千留の早くや友千香

露洗子

分うとあまも長家此織子か

貞利子

病中玄孫

あはれお海門汽室のふはつふ

香折上総

巾今海なる氣のうらるる

吏仙々

あま枯のこもるはくす浪の花 吏中々
さる心やあまもこもる花は野紙々

同

巨燵して只ひらく秋さや川邊 遊子
敷とてくまは姿の柳くち申 さり
孫れこのとくさうのうらさく 秀依
雪くさくさく雪不埋く山崎く家 蓼荷
さ川あま白くやと菊れ里力立 吏山

同

雲消く松もくー露の声

帰耕

雪もくしつる雪の音

伴晋

花のほり眼よりく枯草の

吏国

奥此間冬去る所を

秋社

粒降のそらく氷くや小鞠

喜声

棧此声驚く運ぶ

桃曙

踏分て一筋思く

秀橘

水舟の揺る高ふ氷く

古柳

すくすく

雨舟

氷く氷く

吏陸

氷く氷く

松隣

水舟の舟子

文鱗

同

水舟の舟子

芳菊

水舟の舟子

草也

引舟と云傳ふくは子もか 百来
 山くの香れば如也初くと 吏象
 かを流すさ嶽物屬やを多く 曇妹
 とも言や七朝ハ管もふお 吐雲
 立言れこ何てりや弁の言 芦笛
 明てり難く車のをむさ 閑町
 わく先く温石賃んをの梅 斑鷺
 垣火やと云も二人明れ後 富水

一々々々人々々々々々 水菊
 序多々々し是て柘枝の月夜 平舎

軸

羽二重の裏小暖味ある紙衣 蓼多太
 冬河也罷もむくひもをり 人さ

延享四丁卯仲冬

高松雪戸殿

下田代

